

発行日***2007年11月20日

e-mail:akutagawa_dayori@yahoo.co.jp

芥川だよりの定期購読をご希望の方にはお送りします。お気軽にお申し付けください

編集発行人 下村嘉明

発行所

著物から服を仕立てます



☆着物から服へ・リフォームオーダー☆

☆ポイントカードを初めて作りました☆

高槻市芥川町2-14-3

TEL 072-681-8870



芥川の写真屋さん

台風直撃



台風のニュースが流れるたび、3年前に日本列島を襲った台風を思い出す。舞鶴市の由良川付近の国道が冠水し、観光バスが立ち往生して屋根の上で乗客が一夜を明かす映像に記憶のある人もいるだろう。この台風は私の田舎も直撃し、深い爪痕を残した。◆半月ほどして田舎に帰った時、母が「田んぼは大丈夫だったが、山が凄いいことになっているらしい。誰も行けん。猟師ですら行けん」と言う。私はその「凄いいことになっている」という山の現状をどうしても目の当たりにしたくなった。「よし、わしが見てくる」と、地下足袋を履いてナタとノコギリを腰に下げ、山に向かった。◆半時間ほど林道を歩いて谷を見下ろすと、谷底と

両岸がえぐられている。その痛ましい光景に息をのんだ。さらに進むと、山の斜面に林立していた何十本もの杉が根こそぎなぎ倒されていた。その倒木が折り重なってバリケードのように林道を塞いでいる。ナタをつかってなんとかそのバリケードを乗り越え、私の山に着いた。生い茂っていた樹齢80年を超えるヒノキや杉が一面なぎ倒され、林道は跡形もなく消えている。山から流れ出る沢は、豪雨が誘発した土石流によって川底の岩肌を露わにしている。瓦礫が流れをせき止めて大きな天然ダムをつくり、両岸には土石の河原が広がっていた。この谷の変貌ぶりに私はまざまざと見入った。◆広葉樹の木立が広がる穏やかな溪谷に清流が滔々と流れていた。苔むした岩に腰かけ釣りを楽しんだものだ。いつまでも変わらずにあるだろうと当たり前前に思っていた平穏な山や溪谷が、台風という自然の猛威によって一夜にして破壊された。◆林道は国交省が早くに改修工事を施し、以前より立派になった。周囲の山や谷は今も変わらない。倒木は朽ちていくのを待っている。山が甦るにはどれほどの年月が必要なのだろう。

芥川商店街歳時記

今月の予定

クリスマス・年末セール・12月15日～24日ガラガラ抽選特別賞 石見銀山旅行

「自転車を降りて押して歩こう」運動をします。

深奥幽玄手談の交わり

囲碁で豊かな人生を!



日本棋院高槻支部

芥川囲碁サロン (株)入谷商会経営

日本棋院棋士谷村義行八段による

大盤解説毎月第二日曜日午後2:30より

指導碁毎月第二日曜日午後4:00より

高槻市芥川町2-10-11(芥川商店街)

TEL・FAX 072-682-0403(代)

昭和十四年三月二十六日卒業

文集の一部を書き出してみよう。その頃の学校生活を垣間見ることが出来る。

タバコの銀紙を集めて丸め、学校へ持って行く。飛行機を献納するためという。こんな銀紙で飛行機が出来るのかと思つた。

見ず知らずの兵隊さんに慰問文を書く。綴り方の時間に、先生は後ろ手に組んで隅から隅まで見て歩く。

「兵隊さんありがとう。兵隊さんのおかげで、私たち元気で学校に通っています。田舎も毎日雪が降り寒い日が続いています。雪中行軍もしてきました。こんな事ぐらい、兵隊さんのことを思えば何でもありません。ではさようなら」というような通り一遍のことばかり。「戦地の兵隊さんのことを思えば何でもありません」は、当時は便利な言葉であり、◎がつくのである。

「兵隊さんのことを思つても、やっぱり夏はあついし冬は寒い」と綴り方に書けば、頭をたたかれ、教室に一時間あまり立たされた。今から思うと、あの戦争の時代に、そんな事書いてはまずかつたんだなあ。

先日、健康診断に行つたら、係りの人からいきなり「西暦何年ですか?」と、コンピュータのキーをたたきながら聞く。生年月日に記入してある

のに、なんで。自分もやっと思いでし、西暦一九二六年でしょ。しげしげと私の顔を見て、「お元気ですね」と。なんと失礼な…。

大正十五年生まれ、わが世代を思い、そこにはしたたかに生き抜いた自分の姿があつた。これから先は、誰が何んといおうと自分のために生き、好きな事に熱中できる、そういう実感は、とても戦後生まれの若い世代にはわかつてもらえまい。

少し弱気

「幾重にも折られ、曲げられ、形づく、それがこの世の人の常、それが人生というもの」「折紙人生」のうた 小林旭さん

親にもらつた二本の足は、八十年歩いた今も、まだまだいけそう。歩ける事の幸せ。友達も声をかけて下さる幸せを、しみじみと感謝しています。喜び、感謝ということは、若い頃、そんなに考えず、これは当然なこと、何の感動もなかつたのに。

八十まで生きた現在、どうかこのままの元気で、黄泉の国まで歩いて生きたいと願いつつ、一日一日の日暮れの早さにしみじみ思う。少し弱気になつてきたなあ。こんな気持ちは若い人にはわからないだろうな…

中高年の死

神戸に行つた時、三宮街の地下街で募金をしている人に出会つた。

「自殺者が多いのです。助けて下さい」。年間三万人を超える人が自殺しているという事を聞く。私には何も出来ない。私かて(死にたい)と思つたことあるもん。

立ち止つた手前、何も入れずには居られない。ああ、十、百、五百…、ない。えーい、死ぬよりましか、千円札を思い切つて入れた。「ありがとうございます」の声で、またびつくり、そして恥ずかしかつた。

一万円位の余裕があれば、いいがと。無理に死ぬことない。頑張つて生きて。ふえているのは四十代。七十代、八十代は入つてない、しあわせ。心身共にかなりつかれ切つてしまう。リストラ風の吹くなか、

「あーもうイヤ、つかれた。楽になりたい」と死の誘惑に負けてしまうのかも…。

父親に自殺されても、母親に自殺されても、残された子供が立ち直るのには時間がかかる。誰にでもショックが大きいのしかかり簡単には再起出来ない

募金に千円を入れたから言うわけではないが、政治が無力な今こそ、助け合わなくてはと思う。

字を書く

カタカナがむずかしい。どこにこの字を使つていいのかわからない。

鈴虫の声が聞こえてくる。よい声だなあ。涼しそうな声。ヒグラシが鳴いている。虫の正体を知らないけれど、この虫はカタカナで書くらしい。

都会やその周辺の汚れた空気のところでは鳴かない。その声を聞くことは珍しい。公民館へ行つたときのこと。リーンリーンと何処かで聞こえてくる。よく耳をすますと、足元に置いてあるガラス箱の中。たくさんいる。羽を広げて力いっぱい。みんなのぞき込んで見ている、聞いている。

ある本で読んだ、平安時代に貴族が始めた「虫開き」という遊びに鈴虫、松虫、こおろぎ、ヒグラシも入つていたという。一日の終わりを告げるかのように鳴く声は、秋の気配を感じる。道ばたにはススキが出ている。萩が咲いている庭もある。夜明けが遅くなり日暮れが早い。

宇宙という人間の手ではどうにもならないものに支配されていることを感じる。せみ、ヒグラシ、こおろぎ、一匹一匹の中に日本人のこだわりがあり、大したもんだなあと思う。

いろんな思いを込めて、俳句が浮かんだり詩ができる人がうらやましい。

S太は、トムラウシ山往復の所要時間を、六時間と見ている。ヤツケをふるわせる程度の風はあるものの、穏やかな天候だ。低気圧がスピードを速めたとしても、六時間くらいはもつだろうとよつちやんは樂觀した。

M蔵は不安をぬぐいきれない。西の方を指さし、「筋雲や」と低気圧の接近が気にかかっているようだ。オホーツク海上空には、ハケでなでたような筋状の絹雲がすでに姿を見せていた。天候悪化のきざしである。

六時半にテントをあとにし、トムラウシへいそいだ。先端に赤布を付けた細い竹竿を、五〇から八〇メートル間隔で雪面にさしていく。帰りに迷わないためである。

ちようど一時間くらい登ったあたりだろうか、陽がぼんやりかすみはじめた。あたりにガスも出てきた。空を見あげると、西の彼方にあつた絹雲がまたたく間に東に流れてきている。石狩岳には大きなレンズ雲が出現した。レンズ雲をよく見ると、猛烈なスピードで乱れ動いている。みるみるうちに、薄い白いベールを広げたような絹層雲が、大雪山全体をおおった。よつちやんは、この雲の激しい動きは天候悪化の危急を告げているに

ちがいないと直感し、背筋に悪寒が走った。間もなく容赦なく襲いかかる自然の猛威に戦慄することになる。

M蔵の予想よりもはるかに早く低気圧が近づいているのだ。太平洋と日本海を進む二つの低気圧が合流する場所はおそらく北海道だ。この二つ玉低気圧が一つになったとき、台風なみに荒れくるうことはまちがいない。その時、が、すぐ目の前にきている。

二時間登ってヒサゴ沼にいたるころには、ガスが濃くなり、視界は一〇〇メートルを切るほど悪くなってきた。いくつもの大きな雲のかたまりがあらわれ、は、溶けあい、雲がどんどん厚くなっていく。二つ玉の合流はもうすぐだ。

「まだ一〇時前だが、帰りのことを考えたら、これ以上進むのは危険だろう。もうこのへんで引き返さないと、テントに降りつけないかもしれない」とよつちやんは思う。ところが、S太は「トムラウシまであと一時間ほどだから、もうワンプッチ行こう。それで登れなかったら引き返す」という。「こんな状況で、ほんまかいな」と思いつたたび登りはじめた。

それから二〇分ばかり登ったところで、突然「その時」がきた。まさに一瞬と思えるくらい突然だった。猛烈な吹雪が襲ってきた。とうとう低気圧が一つになり、暴れだしたのだ。立っていられな

いほどの強風が三人を殴りつける。

「引き返そう。離れたらあかんぞ」とS太が叫ぶ。「ザイルを出しましょうか」

とよつちやんが怒鳴ったが、声はとどかない。登りのトレースどおりに下るが、そのトレースもすぐに吹雪にかき消された。赤旗も見えないくらいに、ますます視界が悪くなってきた。昼を少しまわったところだというのに、夕暮れのように薄暗い。

こうなつては、地図は役に立たない。コンパスだけをたよりに、北に進んでいく。ヒサゴ沼あたりまで下つてくると、二メートル先も見えなくなった。いまだこにいるのか、皆目見当がつかない。もはや動くことはできない。進退窮まるといって、このまま立ちすくんでいるわけにはいかない。天候は悪化するばかりだ。生きのびる道は、雪洞を掘る以外にない。S太はピバークを決定する。

雪洞を掘るといっても、道具はピッケルだけである。圧縮されて固くなった雪の斜面を、三人交代で掘りはじめる。ピッケルでは体力を消耗するだけで、なかなか効率が上がらない。スコップがあれば、ピッケルの三、四倍のスピード、三分の一のエネルギーで掘ることができのだが……、雪洞ピバークは初めから念頭になかった。

ピッケルで雪を削り、手で雪をかき出す。入り口は狭くし、中のスペースを広

くするように掘る。掘りすめること三時間が、ようやく三人が座れるだけの雪洞が完成した。すでに四時をまわっている。三人は疲労困憊していた。入り口をツェルトで塞ぎ、雪が吹き込まないようにする。

雪洞は、外の強風と寒気を遮断するカプセルだ。雪洞の中は、外気の気温がどれほど下がっても、氷点下にはならない。狭く居住性は悪いが、このカプセルの中にいれば、三、四日は生きのびることができはすだ。

ストーブも鍋も食糧もない。食事は非常食、水分はテルモスのコーヒーで補う。少しづつ食べ、少しづつ飲む。テルモスのコーヒーがなくなれば、雪をかじる以外ない。

ただ一本のロウソクの明かりだけが、緊張と恐怖を和らげてくれる。外の凄まじい吹雪にも、ロウソクの炎は揺らめくことはない。その小さな炎が雪洞の中を温めてくれる。

寝不足と疲労、そのうえに餓えと渴きが加わる。横になることのできない狭い雪洞の中で、今晚も眠れそうにない。長い、長い夜が始まった。



養女として①

お袋には、母式部の記憶はない。グングリの記憶もわずかしが残ってない。やがて、幼いころ過ごした静かな山あいの寒村を去るときがくる。六歳になった春、歳の離れた従兄弟に背負われて、グングリを後にした。出生のいきさつを知るその従兄弟は「この子の人生はどうなるのだろう」とお袋の今後を思いやつたという。その後、お袋は二度とグングリの地を踏むことはなかった。

長野市の東隣りに須坂という町がある。戦後間もなく、須坂町を中心にまわりの町村が合併し、須坂市となった。旧須坂町はいまは静かな街並みであるが、戦前までは製糸業が盛んで、活気あふれていた。その繁栄のあとは、現在、町のあちこちで見かける重厚な白壁の蔵にうかがえる。

生糸の町として隆盛をきわめていた時代、須坂の歓楽街では「やまと」と「松ヶ枝」という二軒の料亭が栄華を競っていた。日本髪を結い、あでやかな着物を着た芸者たちが、宴の催される料亭の間を行き交い、どちらの料亭も夜ごと賑わいを見せていたという。「やまと」は、やり手の女将が切り盛りしていた。彼女は商才に長け、料亭



経営のほかにも米の先物取引にも手を染めて、財をなしていた。主(あるじ)は遊び好きの道楽者である。突然出かけて、何日か帰ってこないことがたびたびあった。そのときは必ず一人の芸者が色町から消えていた。亡くなる前の床に伏していたとき、「あの世で芸者を買うためだ」といって、枕元に札束を積み重ねていたという。

この夫婦には子どもがなかった。子がないければ、「やまと」も絶えてしまう。「やまと」存続のためにも養子をとなねばならなかった。女将の跡継ぎとして養女となったのが、俺のお袋である。

「やまと」には、お袋の前に一つ年長の少年が養子として入っていた。お袋は彼を「お兄ちゃん」と呼んで慕っていたようだ。昭和十八年、彼が高校四年生のとき、学徒出陣で徴集され、翌一九年に大陸で戦死する。

お袋に続いて、貧しい農家の娘と芸者の娘が「やまと」の養女となった。お袋は少女時代を三人の兄妹とともに

須坂で過ごすことになる。

お袋が養子縁組をするとき、それまでの縁戚関係をいっさい絶つという約束がなされた。グングリともタケシとも縁を切らなければならなかった。グングリの親戚とは縁が途絶えたが、タケシはときどきお袋に会いにきていたらしい。

お袋が「やまと」の養女になった昭和七年(一九三二)は、五・一五事件によつて犬養毅首相が暗殺された年である。前年には満州事変が勃発し、日本は以後十五年におよぶ戦争に足を踏み入れ、激動の時代に入っていく。

当時日本は有数の大国であった。南洋諸島から台湾、朝鮮半島、南樺太を植民地もしくは領土として支配し、中国大陸にも半植民地的支配をおよぼしていた。また、国際連盟の常任理事国であり、世界の五大国に数えられたのである。

その大国「大日本帝国」の経済状況をみると、きわめて脆弱であった。石油や石炭、鉄、非鉄金属、ゴムなどの重要な原料は、覇権を争う英米に深く依存していたのである。そういった重要原料を輸入するための外貨獲得は、生糸と綿布の輸出にたよっていた。つまり、英米に繊維製品を買ってもらつて、その金で石油や石炭を英米から輸入していたわけである。生糸輸出の九

〇パーセントがアメリカ向けであった。貧しい農家の娘を低賃金で製糸工場や紡績工場で働かせ、そこで生産された繊維が「大日本帝国」をささえていたのである。

須坂の町は、アメリカ輸出用の生糸製造でうるおっていた。高級織物の原料である生糸の需要は、輸出先の景気動向に大きく左右される。糸価の変動によつて、大きな利益を生むこともあれば、莫大な損失をこうむることもあった。

外貨獲得は、このような不安定な繊維製品の需要にたよっていた。石油や鉄などの重要原料の供給を、覇権を争っている当の相手国に依存するという矛盾した状況にたいして、英米との摩擦を避ける協調路線と、英米依存から脱却してアジアに自給自足圏を建設しようという現状打破派の二つの路線が対立していた。二十年代は協調派が主流を占めていたが、一九二九年の世界恐慌をきっかけとして三十年代は現状打破派が力をもつようになる。陸軍を中心とした勢力が英米との対決を深め、日本は外に向かつて膨張し、太平洋戦争へと突き進んでいく。

この激動の十五年はお袋の少女時代と重なる。六歳で「やまと」の養女となり、二十歳で敗戦をむかえることになる。

命蝕む化学物質

山彦海彦

昨秋、インターネットで私も参加するある化学物質過敏症の掲示板に、初めての人から控えめな要請がありました。

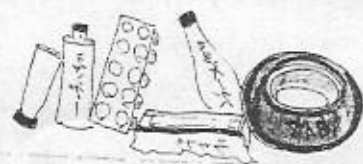
NHKの「ためしてガッテン」という番組で放映されたシックハウスに関する録画があれば分けて欲しいとのこと。彼は兵庫県の山間部の小さな町で塾を経営する男性で、化学物質過敏症でした。塾の子供達や親に化学物質の影響を伝えたいという気持ちからの要請でした。

「いま拡大するアレルギーは化学物質の影響だよ。塾で落ち着きのない子供や学習障害を持った子供も増えたでしょう。それも同じ影響だよ」と私は知ったふうを気取って返信しました。あまり世には知られていないシックハウスの症候群やその重症例、化学物質過敏症を説明してきた臨床環境医学の知見があったからです。しばらくして送られてきた彼の返事は、私の予想を遙かに上回るものでした。

「三年半前に、地元の近隣でゴミの固形燃料化施設(RDF)が稼働を始めたところ、悪い空気が町に流れてくるようになった。私は化学物質過敏症になり、三カ月ほどして耐えきれずその地区には住めなくなった。子供に落ち着

きがなくなり授業にまらない。特に女の子が男のようになってきた。またその地区の死亡件数も稼働前の四倍に跳ね上がった」

「自治会での死亡者は、RDF稼働後二年六カ月で一六名。稼働前二年六カ月での死亡者は四名。ごく近所で二一歳の女性が脳卒中で亡くなっています。自治会役員の奥様がメニエール病や緑内障になりました。特に子供が変になって塾が経営できなくなってきました」



そんな返事をもらったとき、私は「えっ！なに？それ杉並病と同じじゃないか……」と直感しました。彼の地元はのつびきならない状態に陥っていたのです。

一〇年ほど前、東京の杉並区でゴミの中継施設ができた後、周辺住民に奇妙な病気が広がりました。目がかすみ視力が減退した、疲れやすくなった、鼻水が出る、咳が出て喉が痛い、耳鳴りがする、皮膚炎ができた、立ちくらみがする、肩がこり関節が痛い、眠れない、頭痛がする、怒りっぽくなったなど様々な症状が近隣住民を襲ったのです。

その原因を探っていくと、一番特徴的な疾患として当てはめられたのが化学物質過敏症だったのです。

東京都は、増大する不燃ゴミ対策から、分別したプラスチック類を圧縮してブロックにし、容積を小さくして埋立地へと運ぶことにしました。それは、ゴミ収集車が何度もゴミ処理場を往復する運搬ロスと収集車の排気ガス対策からでした。その対策自体は素晴らしいことです。でも、プラスチックを圧縮する過程で使われている可塑剤などが揮発し、圧縮する力で静電気やマイクロプラズマが発生して、もともと有害な可塑剤などの化学物質を化学変化させ、得体の知れない更に有毒な化学物質を発生させていることが判りはじめたのです。

彼の地元で操業を開始したゴミ固形化施設は「杉並病」と同じ被害を周辺住民に及ぼしていたのです。老人や大人の人健康だけでなく子供達の将来を台無しにする形で。

東京都は、その施設から排出された下水から発生した硫化水素による単一被害であると、詳しい調査もしないまま一過性の事件と断定しました。

しかし、杉並病の被害者のなかに「トライボロジ」という、物質の摩擦から物理的な化学変化を研究する化学者がいたのです。「杉並病は硫化水素単一の被害ではない。プラスチック類を主

としたゴミが圧縮する過程でそれから揮発する化学物質が変化をし、様々な有害物質が発生する。それによる公害病なのだ」と。

私はさっそく、録画しておいたそのビデオや、更に衝撃的な脳に関する化学物質過敏症のビデオを彼に送りました。彼自身はこの隠れた公害問題を正確に認識し、そのビデオを使って地元住民への啓蒙活動をしております。しかし地元ではその施設を地域振興策として誘致した関係上、うまくやらねば村八分になりかねません。

解決策は簡単なのです。圧縮機からの排出ガスを完全燃焼させるとか、活性炭のフィルターに吸着させるだけなのです。いま行政の無知による「公害」が、本来ならば自然豊かな兵庫県の山間部、片田舎の住民の健康を蝕みはじめています。

皆さんの周りはどうでしょう。近くにその様な施設はありませんか。高圧線は？携帯電話の中継施設は？畑や田んぼに農薬は撒かれていませんか？

それらの危険性を知るためには、世に先駆けてこれらの害を警告したアメリカの化学物質過敏症発見者セロン・G・ランドルフ医師や、有吉佐和子女史が書かれた『複合汚染』に登場する奈良県五條市の梁瀬義亮医師の発見と苦悩を語らなければなりません。

思い出の人②

明石 幸次郎

紅葉の便りが聞こえる季節になりました。先月に続き私が働いていた工場が印象に残った人を紹介します。今回は家庭の主婦と仕事を元気で両立させて一〇年も工場のトイレと風呂場の掃除をして、現場の人達に感謝されている六四歳のおばちゃん、Kさんです。

私が勤めていた工場のメイントイレの八つ位並んだ小便器の上に、丁度、用を足す目の前に季節毎に、造花ではありませんが、花が飾られていました。今頃は紅葉が飾られていると思います。これは、3K職場のトイレに少しでも潤いがあった方が気分良く働いてもらえるだろう、というKさんの気持ちからでした。自腹を切って家から持って来た造花を飾ってくれていたのです。

毎朝、Kさんがピカピカに磨いてくれた便器で用を足して、ふとその便器の上に花があるのを見ると、何故かほっとした気持ちになったものです。気持ちよく用を足し、今日も一日頑張ろうと言う気持ちにさせて貰いました。

私が朝一番トイレから出ると必ず、次の仕事をテキパキこなしているK

さんに会います。

「Kさん、いつも綺麗にしてもらって有難う。元氣そうやね。朝顔が紅葉に変わってたね。それとKさ

んの顔を見ると、今日も頑張ろうと元氣が出ますわ。私にとってKさんは大正製菓のリポピタンみたいなもんですわー」

「そうやなあ、ここは大正区やし、私のこんな元美人の顔を見て、そんなこと言うてくれるのは、うちの猫と明石さんくらいやなあ。まあ猫は喋れへんけど、顔を見てたらそう言うてくれるのがわかるんよ。若い時はうちのおとうちゃんも、あんたの顔見ていたら、元氣が出て元氣になるわと言ってくれたけど、この頃は、うっとうしい顔するんやね。私のこの美人顔にあきたんやろか」

「美人も毎日見ていたら飽きるのと違いますか？ 私が喋らず、Kさんの顔だけ見ていたら猫みたいなんですか」

「いやあ、明石さんより猫の方がずーとかわいいわ。」

「そんなら、私は猫より下ですか？どぶ鼠みたいなもんですか？」

「そうやわ、まあ、部長さんにそんなこと、鼠と思ってもよう言いません



わ。まあ、どぶ鼠よりましやけど、まあ、二十日鼠にしときますわ。はっはっはー」

「言ってますやんか。私は二十日鼠ですか？ 米蔵で米ばかり食べているあの鼠ですか？」

「そうやね、米ばかり食べていないで、わたしらのために働いて下さいよ」と一言二言冗談をこの大正区のおばちゃんのKさんと言いつつ、本当に元氣を貰って働きました。

Kさんは若かりし頃は銀行で働いて、そこで伴侶を見つけ、二人の子供を育てたそうです。二人の子供には、大学を卒業するまで毎日、愛情弁当を持たせて通わせたと言います。

旦那さんが銀行を退職した時、それまでは専業主婦でしたが、「今度は私が出外に出る」と旦那さんの反対を押し切って、働きに出ることにし、何が出来るかを考えたら、主婦の延長の仕事がエエということで、私が働いていた工場を選んだと言うことでした。

週五日、八時から一六時までパートタイマーで働いていますが、七時半から既に掃除を始めていました。「仕事は段取り良く、集中してやるもので、しかも余裕を持たないと駄目やわ」と言うのが、この人のモットーで、「明石さん、家事も段取りなんですよ。要領よくやらないと、何ぼでも仕事が増える

んよ。奥さんもそうやよ。感謝してますか？ 大変なんよ。男の人には分からんやろね」と言われてました。

この人、毎年五月になれば、柏餅を三〇〇個作り、近所の人、親戚、工場の知り合いに配ります。私も「奥さんと子供に」といって、一〇個も頂きました。季節、季節の行事をきつちりと行っていました。

一日の仕事が終わればオシヤレをして、ママチャリで「お先に、仕事さぼったらアカンでー」とにこにこして帰ります。夕食を段取り良く作り、後は好きな趣味に時間を費やす。謡、三味線、カラオケ、英会話までこなし、一日四八時間必要なほどの忙しさです。

年に四回、工場のお友達（おっさんも含め）一〇人くらいで温泉に行つて、飲んで食べて、しゃべつて、歌うのが何よりも楽しみのことでした。「俺もこの仲間に入れてよ」と言っています。だが、私が会社を途中で辞めてしまったので、この温泉ツアーには参加出来ませんでした。

この工場に居たのはたった一年でしたが、この人生の達人Kさんから学ばせてもらったものは多くありました。人生を楽しくするのは、自分の心がけと周りに対する働きかけであるのではと、この大正区のおばちゃんKさんの顔を思い出す度にふと湧いてきます。

結婚前の九州旅行

お寺に着いて最初に私たちを迎えてくれたのは、入り口付近に根を張るサルスベリの古木でした。ピンク色の小さな花をいっぱい咲かせていました。境内は、手入れのゆきとどいた背の低い松が三方から長い枝を伸ばして前景をつくっています。あたりはまさしく蟬の音が岩に染みいるような閑かさでした。

釣り鐘堂には鐘が見あたりません。戦争によって金属が不足し、農機具から鍋釜、指輪、タンスの取っ手、さらにお寺の鐘まで、強制的に供出させられた時代だったのです。

本堂の前を軽く頭を下げて通りすぎ、強い陽ざしを日傘でさえぎりながら入り口の階段を上ると、ザクロの木があります。あざやかな紅色の花がこうべを垂れるように咲いていました。いろいろな草木がいっぱいです。

お寺は一五〇年ほど前に建てられ、家族が住む庫裡（くり）もだいたい古いように見えました。「まあ、こんな古い家で……」と見回していると、「暑いでっしやる。どうぞおはいり」とお母様が玄関を開けてくださいました。続いてお父様も出てこられ、「さあ、さあ」と気持ちよく迎えてくださいました。

玄関をはいると、三室通してお庭まで見通せるのです。最初のお室には、お庭で見たサルスベリの若い枝葉が大きな花瓶に活けられていました。次の室は内玄関の入り口で、次がお客様を接待する十畳のお室になっています。廊下はまわり縁で、前栽（せんざい）までずっと見渡せました。建物が密集する都会と違い、澄んだ空気と自然の中にとけ込んだ庭や家の佇まいが私をホッとさせてくれます。心が和むような気分になりました。

お土産をお渡しし、私は母と伯母の横に坐つてうつぶわいていました。静かな雰囲気の中で「佛様にご挨拶をして下さいませか」と声をかけられると、ご本尊に御挨拶せねば、とハッと遅まきに気づき、私たちは本堂へ案内していただきました。お父様がおひかりをつけてくださいました。私たちは初めてお逢いする阿弥陀様に心から礼拝して、お香をお供えすると、自然に「南無阿弥陀仏」の名号が口から出てきました。

私たちは、東京でお見合いしたときのつづきのように、和やかに楽しいひとときを過ごさせていただきました。ご両親様もとても喜んでくださり、「こんな時代ですから、簡単なながらも厳肅に行いたいと思っています」と結婚式を楽しみにしている様子です。日取りは、自分の誕生日にしたいというお相手の彼の意向で十月一日に決まりました。

結婚品もすでに別室の広間に用意され、立派な品々ばかりです。お帰りにお持ちかえりいただけますかとおっしゃるので、さっそく荷ごしらえを始めました。「若い人が大阪駅までいっしょに届けてくださるんじゃないかしら」と話をしているところへ、役所へ休暇届けを出しに行っていた彼が帰ってきました。

「お昼食をいただいで、できるだけ早く出発しましょう」と彼と相談し、一時ごろには東京行きの荷物を自転車に乗せて、用意がととのいました。私は動きやすい洋服に着替え、彼は夏服の背広姿です。暑苦しいネクタイはせずに携帯のバッグにしまい込みました。のんびりしている母と伯母をせかして、ようやくお寺をあとにするときがきます。玄関でお見送りくださるご両親にあつくお礼を申しあげ、お別れしました。

こんな田舎で生活できるだろうかという先程の不安はすっかり消え、彼と話をしながら歩いていると、あんなに長く感じた道のりが嘘のように、いつのまにか茨木駅に着いていました。不思議なもので、私はとてもうれい気分になり、元気がなっていたのです。

大阪駅からは、母と伯母は東京行きの汽車に乗り、私と彼は下関行きの汽車に乗ります。そのころは下関までだいたい一二時間かかります。それから関門連絡船で九州に渡ります。それが二〇分ほど、

門司から鹿児島までは一〇時間近くかかりました。いまから思えば、なんと気の長い旅だなあと思っています。大阪から丸一日かけて、最終目的地である宮之城（みやのじょう）に着きました。閑散とした駅から友人のお寺まで歩いて十五分くらいです。お寺は大きく、たいへん立派でした。檀家さんは三千軒もあって、ずいぶん山の奥のほうまで檀家参りをしなくてはならないこともあるそうです。

幼稚園も経営しているのです。お寺の横にはすべり台やブランコが見えましたが、ご住職が応召になれば、彼女が代わりに幼稚園のお世話をしなければなりません。お寺の切り盛りもしなければなりませんし、これからたいへんでしょう。明日の入営を控えて、お寺は檀家さんやご親戚の方たちでごった返していました。忙しく動きまわる友だちとは、二言三言言葉を交わすだけです。「明日の朝が早いのに、まだ用意がすんでいないの」と寂しい顔をする友人に、どのような慰めの言葉をかけていいかわかりません。ゆっくりお話する間もなく、私はただ、遠くで見守るだけでした。

私たちは寝る部屋を教えてもらい、長旅の疲れもあり、同室の親族の方々とのご挨拶もそこそこに横になりました。

翌朝は、五時ごろから檀家の人たちがお手伝いに来られていました。いつもは、

朝寝坊の友人の声も聞こえてきます。私たちがもうかうか寝てはいられません。せめて食事づくりのお手伝いでもと思いましたが、すでに檀家のみなさんが用意してくださっていたのです。私たちは同室の方々とともに朝食をいただきました。

ご住職は、いつでも入営できる軍服姿で出てこられました。七時半には出発準備がととのい、境内は見送りに集まった近所の方々や檀家のみなさんのお声が賑やかです。「お国の為に頑張りますよ」。お寺の最高責任者である住職の出陣です。八時にお寺を出発して、駅に向かいました。

この日、宮之城では住職のほかに四人の出征兵士があり、汽車の発時刻に合わせて駅に集合しました。八時半乗車。大阪へ先に帰る彼は同じ汽車に乗りましたが、兵士たちとは違う車両です。

間もなく、旗を振る多くの人に見送られながら、汽車がゆっくり動き出します。兵士たちは車窓から身を乗り出すようにして手を振っていました。

私は一日残りしました。その日は夜遅くまで、彼女のその後のことや私の現況などを語り合って、話がつきませんでした。次の日の早朝、友と別れを惜しみながら一人東京への長い旅路についてのです。

◇魚あれこれ◇

釣りいろいろ③ たちうお（太刀魚）

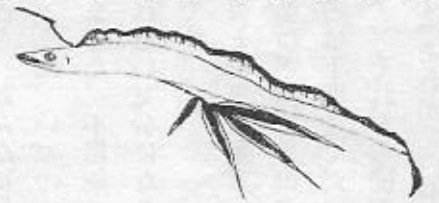
周防春日丸

ほとんど切り身でしか見たことなかった魚「たちうお」を、島に移り住むようになってから十月も終わる頃に定期船の発着場所で初めて釣ったのである。その年は異常発生とも言われるほど沢山のたちうおが釣れた。夕方六時頃にもなると、釣り場所の確保が大変なくらいの賑わいであった。仕掛けはというと、タチ針にビニール製の疑似餌のタコである。最近専ら生餌の鱈（小さ目の）を泳がせて釣るのである。初めてでもあり、どんどん釣れて楽しかったこと、今でも忘れられない強烈な思い出である。

たちうおは体が刀のように長く平たく、尾鰭がなくなっている。釣り針など外すときに、噛まれないよう注意を要するほど歯は鋭く強い。鱗がなく、体表はグアニン層で銀白色に輝いている。手で触るだけでも剥がれやすい。「たちうおはマニキュアにする」という話は半信半疑で聞いていたが、このグアニンは、マニキュアのラメや模造真珠、銀箔紙の材料として使われたりする。

たちうおは「太刀魚」と書くが、急

いで泳ぐときには体をうねらせながら水平に泳ぎ、潮流のゆるやかな所、急ぐ必要のないときには頭を上にして立って、背鰭を細かく波打たせながらゆっくり泳ぐ。その泳ぐ姿から「立ち魚」なのか、魚体が銀白色の太刀形をしているから「太刀魚」なのか。ちなみに、賊がキラキラ光る抜き身の刀をさげて、「金を出せ」と押し入った。その時飼猫が飼主の危急を救うため刀に飛びかかった。なんと感心な猫よ、よくよく見れば太刀ならぬ太刀魚だったという小咄があったり、ひも状の尾を砂の中に入れて立てて寝るらしいと聞いたことがある。



太刀魚は夕方から夜明けの間に上層に浮上する。釣りはもちろん夜であるが、船で漕ぎ（トローリング）で捕る場合、夕方から暗くなるまで、夜明けが明けきるまでの微妙な明るさのなか不思議なほどピタッと喰わなくなるのである。釣りでも漁にしても、潮・朝夕のまずめは決して侮れないものがある。昼間トローリングで深い所の鱈・ハマチ釣りをしている、一緒に捕ることができるともある。針に掛かっている

い泳ぐときには体をうねらせながら水平に泳ぎ、潮流のゆるやかな所、急ぐ必要のないときには頭を上にして立って、背鰭を細かく波打たせながらゆっくり泳ぐ。その泳ぐ姿から「立ち魚」なのか、魚体が銀白色の太刀形をしているから「太刀魚」なのか。ちなみに、賊がキラキラ光る抜き身の刀をさげて、「金を出せ」と押し入った。その時飼猫が飼主の危急を救うため刀に飛びかかった。なんと感心な猫よ、よくよく見れば太刀ならぬ太刀魚だったという小咄があったり、ひも状の尾を砂の中に入れて立てて寝るらしいと聞いたことがある。

鱈などに下から喰いついて肉を噛み切っていたり、頭だけ残した鱈が上がることもある。

たちうおは鱗がないぶん料理しやすく、ビタミンB1・B2・D、他に亜鉛・銅などのミネラルも多く、タンパク質より脂肪分が多くDHA（ドコサヘキサエン酸）が含まれていて栄養価も高く美味しい魚である。

それにしても、細かく波打たせる銀白色の薄いレースのような背鰭は優雅である。

川柳

真本嘉代子

- ☆ 柔ママ一歩も退かぬ金メダル
- ☆ 癒し旅泊った宿の月明かり
- ☆ 栗拾い帽子被って速み足

「芥川だより・ハイキングのお誘い」

日時／十二月六日（木）九時

JR高槻西口北側集合

予定コース／善峯寺（よしみねでら）

お正月の雑煮振る舞い

来年の正月・元旦。朝十時から雑煮振る舞いを梵の店頭でおこないます。都合のつく方は来て下さい。お手伝いの方募集します。

編集後記

皆さんのおかげで、知らぬ間に十七号まできました。ありがとうございます。皆さんのご支援をお願いします。